

興福寺所蔵「八門秘要抄」の紙背文書

歴 史 研 究 室

興福寺に所蔵されている聖教・古文書箱の「第四函」には25点の聖教が収められているが、そのうちの「八門秘要抄」には鎌倉期書写(第19号)と南北朝期書写(第23号)の二冊がある。第4函にはほかに既に紹介されている「因明短釈法自相」(第17号)など紙背文書のある聖教もいくつかみられ、二種の「八門秘要抄」のうち、南北朝期のものに紙背文書がある。「八門秘要抄」は、第19号本奥書によれば、「本云 建仁二年正月於笠置山興玄法師三藏会学問次被注之 予列座同聞之 建仁二年五月三日書了 御草本極難見解之間不見別何文字之字多々 仍後可直之」とあり、表紙には「八門秘要抄 笠置寺聖人御草 実乗」とある。また第23号には、その表紙に「八門秘要抄 良算草」とあることとあわせて、「八門秘要抄」は建仁二年(1202)良算の述作とされる。なお第23号には上記の表書の下に「大法師経深之／奥転経院」とみえ、また奥書の初行に「大法師経深」とあり、ついで奥書は、「貞和五年九月廿七日於窪院書写之、同廿八日交了 伝聞八門秘要抄云々 不可有他見」とつづく。したがって第23号は貞和五年(1349)経深の筆になるものである。

この「八門秘要抄」(第23号)は、縦31.4 cm、横22.3 cmの袋綴装となっており、紙数は48枚で、そのほとんどに紙背文書がある。料紙は楮紙で、其紙の表紙には「興福／寺印」朱方印が捺されている。

紙背文書には、経深の書状(勘返を伴うものなど)も数通みられるが、そのほか、奥転経院の経深に関わる目安の案文がみられる。経深は当時、興福寺内で同じ六方の丑寅方に属する瓦坊を管領していたごとくで、それに関連して泰深と相論があった。そのとき提出された目安の土代が(八①)で、3紙にわたるが末尾は書きさしになっている。なおその第3紙目の部分に関しては、別に二種の土代(八②、③)が残っているのであわせて掲げておく。

今一つは、春日社一切経供僧の闕分について、その闕に補任してくれるように申請している諸僧の申状がまとまってある。「八門秘要抄」奥書や年紀のあるほかの紙背文書からみて、貞和四年の供僧闕分かと思われるものが(三)にみえ、補任を所望している僧名は(四)にみえている。そして闕分への補任を所望の僧侶のうち、数名につき申状が残っている。(二、五、六)はその申状の例であるが、そのほか英豪、賢範、宥範、訓寛、経秀、真空の申状があり(* 注文所載僧名)、経秀の申状を除き、すべて折紙の申状である。なお注文にみえる弁覚のように、「一類挙別訴状歎申入」とあるごとく、(七)の申状によって補任される場合もみられた。またここには掲げなかったが、一切経供僧の任命に関して、経深や懐印らで書状・勘返のやりとりが行われている書状が残っており、供僧補任に際しては、(一)のごとく評定が行われたであろう。なお、注文にみられる僧名は、(九)に掲げた法華会堅義見参帳にも幾人かみえる。

(綾村 宏)

尊經僧都遙後段曆丙年中對經定之子息書賜坊舍讓狀歟事、僧都老後前^後不覺之時分、經定并子息兩三晝夜親近之間、一旦順彼等之懇望雖令成安堵之思問答泰深之狀跡於令讓與經深之次第者隱密經定等、經深者以故泰深雖望補治之由返答之趣書賜經定等之條背問答于泰深之狀跡有參差之上者雖被備龜鏡、其上他人和与之習以先狀為本、經深所帶之讓狀尤可為得利之証文者哉、況經定既去渡坊舍於玄深畢、於今者

(以下余白)

〔斷簡〕

(第18紙)

報謝之志許之間、壳殘者隨令稽古鑽仰付法文可讓與經深之條無子細、且可被令取置此狀云、嫌經寬得業讓與經深之旨顯然也、其上學侶補弟之習聖教相傳其根本也、而付法文聖教讓與經深之旨書載今狀之外者、始中終無讓別人之筆跡是又以經深處于補弟之支証也、仍云坊舍云法文資財等、經深悉可令管領之旨可被下安堵者也、

一經定為子息等遙後段曆丙年中令書置坊舍讓狀事者、尊經僧都老耄為前後不覺之時分之上、經定并子息兩三晝夜親近之間、一旦順彼等之懇望雖令成安堵之思、於有讓補經深之筆跡者、猶隱其美義於經定以故泰深雖望補治之由返答之趣書賜經定之條、大背問答、泰深之狀跡既有參差之上者、雖為龜鏡者哉、況他人和与之習以先狀為本以書賜非器用中童子法師後狀被令破申

置泰深之先狀事尤可為不便者哉、縱雖有拘等之理隨人牀有潤色者常之法也、經定^{者中童子法師}弟子息^又同經之所從也、以猶子之儀讓与之旨令書置之條察尊老後之慈悲致過分之競望故也、經深^{經深帶千萬文}之親類于今學侶之隨一也、乍帶篇^{可望補弟哉}支証、被妨所從之餘流之條併所仰上察^是、其上經定成自專^{太深}之思對放去狀子息等同不可申子細之旨先放去狀^仍於經寬得業者、任僧都之索意可妨經寬得業之競望之由乍及連署等、近日和与經寬可謂一事兩方之沙汰歟、於經定等之餘流者旁不可有御許容者也、

③

〔斷簡〕

(第21紙)

經深之條誰可申子細哉、其上學侶補弟之習者法文相傳專其根本也、而付法文聖教讓與經深之旨書載今狀之外者、始中終無讓別人之筆跡、是又以經深處于補弟之支証也、仍云坊舍云法文資財等、悉可為經深之管領之旨早可被下安堵者也、

一經定為子息等遙後段曆丙年中令書置坊舍讓狀事者、尊經僧都老耄^為前後不覺之時分之上、經定并子息兩三晝夜親近之間、一旦順彼等之懇望雖令成安堵之思、於有讓與經深之筆跡者、猶隱經定經深者以故泰深雖望補治之由返答之趣、書賜彼經定之條背問答于泰深之狀跡有其參差可非龜鑑^是、就中於經寬得業者、重病有憚之時分買得之間、雖借彼名字帶妻子之上、非^{若止住之}

器云、帶妻子由之外又載非淨處止住之器故有深子細歟、^{大令符合門徒等進署}有上察不可有御許容御競望、於經深者以故^{法眼可補治之由、雖所望之、自買得之初借用他物加修理、每度皆以借用物也、無亂返之力者始終自專難治之由返答早云、此文章如經寬得業有別子細并捐之趣不載之、其上背申置泰深兩度狀跡畢}、況他人和与之習以先狀為本以書^賜中童法師之後狀被令破問答泰深先狀事可為不便者哉、仍於書賜經定之餘流者旁以不可^有御許容者歟^是、其上玄深管^領、坊事、子息等一同不可申子細之旨乍放狀跡、以彼尊經之後狀近日和与經寬得業歟之聞有之、事夷者可謂一事兩方之沙汰歟、放玄深之狀又自玄深之方去渡經深之上者、經寬得業僅取書賜經定之後狀雖構申相傳之由更不可成龜鏡之條、旁其由繁者歟^{四、是}、

(4) 法華會堅義見參帳〔後欠〕

(第42紙)

法華會御堅義見參帳貞和二年十月三日

尊守得業

懷融

專頭院

実弘

賢範

敵英

契融

昇宗

覺能

善英

清春

憲懷

英平

玄深

源重

祐盛

禪懷

懷繼

懷重

玄重

延重

慶秀

頼專

範弘

敵懷

敵円

(後欠)

舜堯房等皆為不淨行之身、被召加御經案之条、近來蹤跡人

皆知之、况觀禪院每月兩唯識講談義衆者、故同

當御門跡御氣色所被召加也、則弁竟英性俊有等是其隨一也、凡雖墮世間交聚落、云維摩會擬業之器

用、云法華會着座之次第、被賞以前之學功之条、寺門不易之法則也、而至今御願忽隔知見之条、豈

不被垂 御哀憐哉、就中於統芳方者、或橫入非分之輩、或晚學不堪之侶、僅募兩講之□、加円堂之

列者置而不論任臆次被拙賞之、況至此一列者、自幼日至長年忍飢寒、又嗜學業權肝膽、多積勤勞、

所謂溜州會撲揚講、番論義、觀苦初二年等講師、兩院家御請定、公私所論場、一々之勞効、篇々

之經歷不可勝計、然後加寺家論匠、遂法華會豎義、為學侶之器用被稱未番論義之輩、慈悲万行之神慮

之前、豈漏廣大無相之施供哉、然則縱雖新儀、當寺社興隆之 御代尤可有扶持之御計、況於有眼前

之近例乎、所詮依淨不淨行之階級、雖有一旦超越之御沙汰、且被垂 恩憐、且被追蹤跡、以此一列

終被召加彼供僧者、弥仰有道之德化、奉祈無疆之榮運矣、不耐愁吟之至、粗勤子細言上如件、

貞和四年十二月 日

(ハ)①僧經深目安案(土代) (第37・19・20紙)

目安 瓦坊者經深可致管領子細条、事

副進

一通 尊經建武年中以經深定補弟由契約後、泰深

一通 瓦坊可讓与經深由承及可書賜讓狀之趣、泰深就中遣之、尊經

問可謂出券契由中經深也、於讓狀者雖何時不可有子細之由案文

一通 尊經之讓狀事、泰深重中遣之時返狀雖無改反所存寺役之料足

細、且可被令取置此狀之旨并買得之時重柄有權

問、付同宿難借經寬名字非當功止住器用由案文

一通 尊經歷年中書賜經深定狀又嫌經寬畢、於經深者無

趣隱密經□□故歟、前後□□□□□□

一通 帶尊經之後日讓狀成自專之思

一通 經定之故目筆狀、自玄深方去賜經深案文

六通 瓦坊買得直錢之請取并口入人良操得業之狀等對尊經僧都

一通 經寬對玄深所訴申第二度狀經寬者非尊經僧都之補

弟之由承伏之、并尊經不返賜調度文書之間及上訴

由案文

此外經寬得業於坊依有不儀之子細、尊經僧都永止寄宿之儀之上

者、縱雖有算檢成事可坊坊務之由有門使等連署之狀依體存暫不能

業進背尊經僧都之遺命不當之至極歟

一先經深可令管領瓦坊之道理条、見于具書之間、

各其趣大概所注進也、

一泰深為瓦坊修理充賜料足於經深之条、為補弟之

支証事

凡尊經僧都者為泰深之舍弟深預恩賜、大小事依

蒙彼扶持、同宿經深可讓補當坊之由契約之、即

預置乘專僧都之券契可取出之旨申之間、密々相

語泰深之處有所存、自今表讓補之志歟、早可領

狀破損過法之上者、可施修理之功由意見之後、

去賜字治庄年貢之間、加隨分之修理畢、經深不

得房舍之讓者、泰深何修理料足可充賜經深哉、

可足上察歟、

一尊經僧都可讓補當坊於經深之旨、不改反日來之

契約、并以經寬之名字雖買得之載裏書之上者、

不可為後日相監之趣申泰深返狀明白事

尊經問答泰深兩度狀之內、初度狀者取讓補經深

之所存、不改反日來之契約、於讓狀者雖為何時

不可有子細、可請出置籠質物之券契之由申經深

之条為不可有改反之基由并借經寬名字、雖買得

之於彼壳文載裏書畢、可申〇淨行之鉢坊舍之間、

於經寬者非其器用可讓經深之由遮表之所存分明

者哉、

一尊經申泰深第二度返狀為寺役料足不沽却瓦坊者

付法文正教可讓与經深之条無子細、且以此狀可

用讓狀之趣并經寬得業者非淨処止住之器用□□

書賜之上者□□經深之証文事

次年重問答泰深返狀取此住坊事、雖無改反日來

之所存聊斟酌之分者、寺役之料足劬勞許也、經

寬得業者重病未復本之時分、付其時同宿暫雖

借名字當坊止住不相応事也、諸事神恩報謝之志

許之間、壳殘者隨致稽古鑽仰付法文正教可讓与

經深之条無子細、若不慮□亡者、且可被令取置

此狀之旨書載之畢、嫌經寬得業讓与經深之条顯

然也、誰向此明鏡監彼坊務哉、其上学侶補弟之

習法文相伝專其根本也、而付法文聖教讓与經深

之旨書載今狀之外者、始中終無讓別人之筆跡、

是又以經深処于補弟之支証也、云坊舍云法文資

財等悉可令管領旨、早可被下安堵者也、

一經定之子息等帶尊經之後日讓狀、成管領之思、

雖去渡坊舍於玄深、難及經深所帶之先狀之上、

讓彼玄深經定之自筆自判之狀、自玄深之方去賜

「八門秘要抄」紙背文書(抄)

(第4函第23号)

十二月廿日 懷実請文

(一) 龍華院方評定記錄

(第1紙)

「龍華院方評定」

八月四日龍花院方評定曰、

就阿彌院供僧所望、去曆応年中内盛雖有望申旨、此駄亂行不儀之間、不被入件供僧事、当方所令存知也、即雖經多年于今被超越于教輩、空送旬月之由評定候、

(二) 僧源重申狀(折紙)

(第5紙)

源重申 年四十九 戒三十一

一切經輪轉衆所望事

件輪轉衆者、被賞 院家被管之器用被恩補者佳例也、爰源重數年參御坊中、致公私之奉公、年胎既及五旬、恩賜之處誰謂非拋哉、望請鴻慈、殊被補件闕者、弥仰有遺之貴、倍抽無貳之忠而已、

(三) 懷実請文(折紙)

(第6紙下半)

当年一切經衆闕分

第一番

快憲

第三々

乘田 堯懷

玄高 訓秀

第四々

兼尋

已上

如此候、可令得御意給候哉、恐々謹言、

(四) 一切經衆所望僧名注文(折紙)

(第6紙上半)

還補所望

隆範得業

懷弘

以上

宗祐五師

覺耀得業

類顯得業

弁寛八十

經寛七十

訓寛六十

供目代 善繼

憲実供目代以上

祐盛供目代以上

玄重 法用僧

憲尹 五十

有範 六十

寛經 六十

輪轉衆供目代之所源重、薦次者寛乘、

(四) 僧寛經申狀(折紙)

寛經申 年六十 戒五十一

一切經供僧所望事

件一切經者、寺社規模之勤行、院家深重之御願也、然以參勤送年序勞功、被補供僧者、古今嘉例也、爰寛經雖為貧道身、經歷晝夜朝暮之勤行、寺住年

久勞積月累、預恩補誰謂非拋乎、就中經三階之業、既動大小之寺役了、勞功不恥等倫、早被垂御哀憐者、弥奉仰 賢政之貴矣、

(四) 憲実申狀(折紙)

(第9紙)

憲実申 年五十七 戒四十一

春日社一切經供僧所望事

件供僧者、住寺不退之輩、修學鑽仰之族、預恩補者嘉例也、爰憲実烈學侶隨一為多年、幸遇教足闕分參、被垂 御哀憐預、御恩補者、弥奉仰憲法貴矣、

(五) 宿老円堂等申狀

(第11・10紙)

「就此烈訴弁寛預御補任了 十二月廿四日」

前途沈滯宿老円堂等謹言上

欲且被垂 恩憐且任蹤跡、拜補 春日社一切經

供僧間事

右供僧者、住寺之所期、修學之本望也、

白河上皇恩勅之 寂願、春日權現嚴重之靈託、緯詳旧記、不遑羅縷者乎、是則一寺滿遍之依怙、五宗住持之要樞也、爰雖稱未番論義、不達前途本意之輩、於淨行仁者、被優以前之學功、預次第之恩賞、至不淨行者、近來一向御奇置之条、尤不便之次第也、且前途沈滯始終難治之篇、修學稽古涯分提携之段、淨不淨行更以無相替儀上者、縱雖有遲速之不同、不淨行之輩生涯絕供僧之望乎、彼唯識講者、講經論談之御勤、一向修學之供施也、然而沈滯之輩濫行之族、皆以被採用、況於學非學 広博無相之御願乎、然則盛円教親房 善舜定實房 宗英